司馬遼太郎

街道をゆく 三十

愛蘭土紀行 I

街道をゆく 三十

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十三年六月二十日　第一刷発行

街道をゆく　三十

定価　一一〇〇円

著者　司馬遼太郎
発行者　八尋舜右
印刷所　凸版印刷
製本所　青柳製本
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地　五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎　一九八八年

ISBN4-02-255550-5
Printed in Japan

街道をゆく　三十

本書には「週刊朝日」昭和六十二年五月十五日号・連載第七百七十回から、十月九日・第七百九十一回までを収録。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

愛蘭土紀行（アイルランド）Ⅰ　7
ケルト人　23
ギリシア・ローマ文明の重さ

ケルトの妖精と幻視 37
〝鯨の村〟ホテル 51
明治の悲しみ 65
紳士と浮浪者 81
いまは昔 95
駅舎・空巣 111
リヴァプール到着 125
ビートルズの故郷 139
死んだ鍋 153
ヘンリー八世 167

ライアンの娘と大聖堂 181
郷に入っては 195
ベケット 209
オコンネル通り 225
スウィフトの寺 241
文学の街 255
ジョイスの砲台へ 269
神話と金銭 283
ウィスキーのEを飲む 297
ジョン・ライリー氏 311

題字＝棟方志功
え　＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

ケルト人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヨーロッパは、その人文を一枚の岩盤でみることができる。

しかし同時に多様でもある。その多様さを、気質群で見てもよい。

ゲルマン系のオランダ人を例にとってみる。十六世紀、世界史上最初に〝ビッグ・ビジネス〟という無形の文明能力を獲得したひとびとである。営利という一目的に対し、機械のように人間たちが部品化し、自分のポジションを心得つつ、組織を稼動させてみせるという芸である。十六世紀のオランダ人の文明史的な大発明といっていい。

この芸当は、たとえばおなじ世紀のラテン系のスペイン人たちには望むべくもなかったろう。かれらは多分に英雄主義的で、芸術と冒険という個人のしごとにおいてはかがやきをみせたものの、組織の部品になることには天性にが手のようだった。

周知のように、スペインは十六、七世紀は、文字どおり世界帝国だった。小銃と大艦をもたず、広域国家をも持っていなかったアジアの諸方や新大陸に対し、大いに掠奪し、さかんに植民地にした。ただ、盗賊が財宝をかかえているような経済だった。

スペインは、それらの果実を使用して——のちのイギリスのように——自分の産業の基礎をきずくこやしにするというふうには、しなかった。王や貴族、冒険家たちがその財宝をつかいはたしたとき、故の木阿弥になった。

「それが、ラテン系というものです」

ともいえるし、あるいはひとによっては、
「当時のカトリック（旧教）のせいです」
と、意外な分類法をもちだすかもしれない。

十六世紀、カトリックからプロテスタント（新教）が分離する。
このあたらしい宗教運動とその教義は、産業や商品経済の盛行と不離なものだった。
大ざっぱにいえば、当時（十六、七世紀）のヨーロッパ庶民にとってカトリック教徒であるということは、のんきなものだった。なにしろ教会が神の卸し元になってくれていたのである。
信徒たちは、神については教会にまかせきりで、それを頼りきったまま、口をあけた無知文盲でいることさえ可能だった。極端にいえば、自律的でなくても、教会に行って罪を告解してさえいれば、あとは神父がよろしく神に対して処理してくれもした。
ところが、十六、七世紀、もしくはそれ以前から、商品生産と流通がさかんになるにつれて、とくに都市のひとびとの頭の働きが忙しくなった。農村から出てきた者たちが、商人になったり、工房の親方、もしくは船の船長や会計係になったりすると、それ以前、農村の中で、教会と慣習にくるまれてのんきに過ごした日々がうそのように思われた。
いわばべつの動物になったように、個人が矢おもてに立たされた。個人としての責任や義務だけで生きてゆかざるをえなくなったのである。

もうひとつ言えば、自分のなやみを、教会に十把(じっぱ)ひとからげに背負ってもらうようにはいかなくなった。ともかくもあたらしい社会は、個々の自律を要求した。たとえば銀行の書記たちが、たとえ一人でも自律的でなくなれば銀行業務という機械運動はストップせざるをえない。

「いっさいはこの銀行という建物が処理してくださいます」

などと書記がそういって草っ原で昼寝をしてしまえば、世の中そのものも動かなくなってしまうのである。

信仰の面でも、おなじだった。

「神さまのことはすべて教会だのみです」

などと、商工業地帯のひとびとはいわなくなった。

商取引は、あくまでも個人が個人に対しておこなう。神との取引も同様で、ローマ教会という中間業者を外して、神に対し自分自身がじかに取引せざるをえなくなった。それが、新教(プロテスタンティズム)というものだった。

自然、新教は徹底的に自律を要求した。

もはや神と自分のあいだには変電装置や避雷針がなくなった。神は雷のようにつねに垂直に個人の上にあり、罪や背教の行為については、神は轟々と落雷するようにじかに個人の上に落ちるのである。このため、新教の初期から十九世紀ごろまでのプロテスタントの信徒の典型は、凜乎(りんこ)として敬虔(けいけん)なものであった。

この精神が、同時期に勃興してきたビジネス文明にも、よく適った。というよりも、初期ビジネス時代を動かした精神と、プロテスタントとは不離なものであった。

ここで、息を抜きたい。

この稿は、カトリック国（五パーセントはプロテスタント）であるアイルランドのことを書こうとしている。

書くにあたって、以上のように、ことごとしい事柄から書きはじめざるをえないのが、この紀行の荷厄介なところである。

息ぬきついでに、挿話を紹介する。

『ライフ』誌の長老写真家で、レンズを通しての二十世紀の目撃者ともいうべきジョン・フィリップスが、自分の写真だけで編んだ現代史『LIFETIME』（松本清張監訳　光文社）という本を出している。そのなかで、かれはアイルランドに上陸して早々出くわした〝事件〟について、こう語っている。

早速、物乞いが近づいてきて、「旦那、お恵みを」と言った。それがあまりにも堂々たる態度なので、思わず言われるとおりにした。五番目の物乞いが寄ってくる頃には、「旦那」の小銭は底を突いていた。私が言い訳しようとすると、物乞いは冷ややかな目を向けた。

「地獄で火あぶりの目に遭え、このプロテスタント野郎！」

こうののしると、物乞いはつばを吐いた。

みずから勤労してみずからの稼ぎで食うという自助の精神は、プロテスタントのものである。それに対し、カトリックは教会にくるまれているから、たとえなにかのはずみで物乞いをしようとも、天国へゆけることだけは確実なのである。だから堂々ともしている。この場面では、そういう自分に援助をしない人間をぼろくそにののしりさえするのだが、アイルランドにおける最大の悪罵が、

「プロテスタント野郎」

というのがおもしろい。新教のやつらはどうせ地獄へゆく。やつらはそんなことも知らずに浮世でビジネスにうつつをぬかし、仲間を組んで金儲けをしている。恥知らず、バカ、胴欲、性悪（しょうわる）、腹黒（はらぐろ）、あらゆる悪罵も、プロテスタントに対してばかりは種ぎれになるほどである。

新教への憎悪は、アイルランドにあっては、歴史的にも、こんにちにあっても深刻というほかない。なにしろ新教（この場合は英国）のために国ぐるみ盗まれ、植民地にされ、ほんの前の世紀にいたるまで、身ぐるみ剝がれるように搾りあげられた。ある世紀では煮たきする薪（たきぎ）にさえ事欠いたといわれる。

ここでややこしいのは、アイリッシュにとって大きらいな英国が英国国教会（アングリカン・チャーチ）の国であること

である。

「アングリカン・チャーチ？　そんな言葉、きいたこともないね」

と、私はダブリン（アイルランド共和国の首都）で、カトリック教会の慈善運動に熱心な三十代の主婦からいわれた。日本なら高校生が西洋史で習うことばではないか。

つまりは、日本でいう聖公会、いわば立教大学の宗旨である（ＹＭＣＡももとは英国国教会の信徒によっておこされた）。

「それをプロテスタントというんだよ」

彼女は、いった。

これには、私は無知を恥じた。アングリカン・チャーチとは、新旧折衷の教派だと私は思っていた。いわば新旧の中間的存在で、プロテスタントの仲間に入れるにはちょっとひるみが感じられると思っていたのだが、アイルランドでは憎むべきプロテスタントの代表だった。要するに、

「プロテスタント野郎」

というのは、教義論よりも英国を憎悪するなげつけ言葉のようだった。

思いつくままにのべたい。

十六世紀までカトリック欧州の覇者であり、かつ欧州以外の世界の支配者だったスペイン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com